



パラグラフ・ライティングの基本ルール : 日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて

永井, 敦

(Citation)

神戸大学留学生教育研究, 7:1-20

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482093>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482093>



〔研究ノート〕

パラグラフ・ライティングの基本ルール —日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて—

永井 敦

【キーワード】パラグラフ、パラグラフ・ライティング、アカデミック・ライティング

1. はじめに

論理的な文章を書くための重要な技術の一つに、「パラグラフ・ライティング」がある。戸田山（2022）によれば、「パラグラフ」とは論文を始めとする論理的な文章を構成するための「最小構成単位」であり（p.207）、パラグラフの考え方に基づいた「パラグラフ・ライティング」は、倉島（2012）あるいは三森（2021）が述べるように、文章作成技法のグローバル・スタンダードであると言ってよい。

しかしながら、日本では、パラグラフ・ライティングの考え方が十分に普及しているとは言えない。ビジネス分野でパラグラフ・ライティングの普及に努める倉島（2012）は、日本の学校教育でパラグラフ・ライティングが正しく指導されていないために、日本人の多く（倉島の言葉では「ほぼ全員」）がパラグラフで文章を書くことができないと指摘する（p.3）。大学で科学ライティングを教える更科（2020）も、パラグラフ・ライティングは、日本ではあまり普及していないと述べている（p.151）。また、文筆家の外山滋比古（2020）も、我々は文章を書く時にパラグラフを意識しないと述べており、その理由として、多くの人はパラグラフ・ライティングについて教えられたことがないことを挙げている（p.22）。

パラグラフ・ライティングが日本で普及していない別の理由として、日本語母語話者の多くが「パラグラフ」と「段落」を明確に区別していないことも考えられる。実際、村越（2015）が指摘したように、識者の間でもパラグラフと段落の概念についての理解は様々である。本稿は、あくまでパラグラフに焦点を当てるものであり、段落との違いについては深入りしないが、石黒（2022）が述べているように、日本語の段落は、パラグラフとは異なり、文章執筆時のルールが確立されていない（p.34）。すなわち、段落は、書き手の感覚的な判断に基づいて構成される。これには、書き手の自由度が高くなるという利点があるものの、石黒（2022）が指摘するように、その自由度の高さゆえに、書き手と読み手の共通基盤が崩れやすく、情報の効

果的な伝達という目的からは望ましくない (p.35)。したがって、書き方のルールがある程度確立している「パラグラフ・ライティング」を、文章作成技術として改めて学ぶことは、日本語使用者にとっても有用である。

近年、我が国の高等教育においては、パラグラフ・ライティング教育に関するニーズが高まりつつある。というのも、渡辺・島田 (2017) が指摘しているように、多くの日本の大学生 (特に新入生) は、文章を「組み立てる技術」を欠いているからである (p.163)。また、小熊 (2022) が述べているようにアカデミック・ライティングを教えるための専用科目を設置する大学が増えつつある (p.10)。実際、時任・三井・福山・西口 (2022) は、全国の四年制大学に調査を行い、回答が得られた186校の内、独立した科目としてライティング指導を全学で実施する大学は、101校 (54.3%) に上ると報告した。さらに、澤井 (2015) に見られるように、初年次教育においてパラグラフ・ライティングが扱われることもある。大学では、レポートなど論理的な文章の作成を求められる機会が多いことを考えても、大学生がパラグラフ・ライティングを学ぶことは有用である。

パラグラフ・ライティングについては、多くの指南書や研究論文が出版されてきたが、著者によってその扱い方は様々であり、その基本的なルールが何であるかは、教える側にとって必ずしも明確ではない。例えば、CiNiiにおいて「パラグラフ・ライティング」のフレーズ検索をしてみると、「論文」カテゴリーで93件、「書籍」カテゴリーで32件の検索結果が得られる (2022年12月6日時点)。しかしながら、それらの文献においても、パラグラフ・ライティングの説明に共通した部分もあれば (例えば、パラグラフの一般的な構造)、異なる部分もある (例えば、後述するパラグラフの構成要素)。学習者のようにパラグラフ・ライティングを「学ぶ」側の立場ではなく、教育現場で「教える」側の立場からすると、教育内容について一定の合意が得られていないことは不都合である⁽¹⁾。

本稿は、以上の問題意識を始点として、日本におけるパラグラフ・ライティング教育の促進のため、パラグラフ・ライティングについて、実践家間で、ある程度合意が見られる基本的なルールを整理することを試みる。もし、そのような基本ルールが明確になれば、パラグラフ・ライティングを教える側の知識の整理に役立つだけでなく、教材の開発や、あるいは評価にも活用することができだろう。

研究方法には文献分析を用いて、その結果を、ナラティブ・レビューの形で記述する。文献検索のデータベースにはCiNii及びGoogle Scholarを用いた。また、文献から文献へと芋づる式の文献探索も行った。その結果、1960年代の文献である

Williams (1969) から、本稿執筆時の2022年12月までに出版された文献 (61件) を分析の対象に含めた。ただし、本稿は、教育実践上有用な知見を見出すことを目的としているため、パラグラフ・ライティングに関する包括的な文献分析は、その射程を超える。また、今回分析した文献の多くは邦文で出版されたものであり、その点でも限定的である。

文献分析の手順は、Hogue (2014) やOshima & Hogue (2007) など、英語圏の標準的な教科書で扱われている事項を出発点として、そこに他の文献からの知見を加えながら、最終的には、筆者が教授上重要と判断するルールを抽出するという流れである。ゆえに、情報の取捨選択には、筆者の主観的判断が関与し、そこには一定の恣意性が認められる。この意味で、以下の考察は伝統的なレビューの手法、すなわち、ナラティブ・レビューと同じ性質を持ち、そこには自ずと限界がある。しかし、筆者の管見の限り、パラグラフ・ライティングのルールについて知見の整理を試みた研究は見当たらないことから、本研究には、一つの記述的な研究として意義があると考ええる。

以下ではまず、文献分析の過程で明らかになった、パラグラフ・ライティングに関する基礎的な情報をまとめる。その後で、これらの情報をふまえ、パラグラフ・ライティングの基本ルールを記述し、内容について補足する。最後に、今後の課題と展望を述べる。

2. パラグラフ・ライティング

2-1 パラグラフ

今回分析した文献の知見を総合的にふまえて、本稿ではパラグラフを、形態的な方法で視覚的に区別される、ある一つの話題について書かれた、互いに関連する文の集まり、とあらかじめ定義する。形態的な方法とは、改行字下げや空白行の挿入などを意味している。また、この定義から、「一つのパラグラフでは、一つのトピックについて書く」という、パラグラフ・ライティングにおいて最も重要なルールの一つが自然に導かれる。さらに、パラグラフが、原則として複数の文から構成されることも、上の定義に含意されている。

2-2 パラグラフの構造

パラグラフはトピック・センテンス (topic sentence)、サポーティング・センテンス (supporting sentence(s))、コンクルーディング・センテンス (concluding

sentence) の三要素から成る、一つの構造を持つ。この点は多くの文献で説明されており、標準的な考え方と言ってよい⁽²⁾。上述のパラグラフの定義をふまえて言えば、一つのパラグラフにおいて、トピック・センテンスが提示する内容について、サポーター・センテンスがその詳細を補い、コンクルーディング・センテンスで内容をまとめるという関係にある。以下では、これらのパラグラフの各要素について、より詳細に述べる。

2-2-1 トピック・センテンス

トピック・センテンスとは、読み手に内容の見通しを与えるために、そのパラグラフで何を述べるかを一文で述べた文であり、原則としてパラグラフの冒頭に置かれる。Reid (2000) が指摘するように、トピック・センテンスはパラグラフにおいて最も重要な文である (p.17)。実際、Williams (1969) のパラグラフ・ライティングに関する先駆的な教材でも、トピック・センテンスの理解が全体のテーマとなっている。トピック・センテンスをパラグラフの冒頭に置くことで、読み手はパラグラフの内容を効率よく読み取ることが可能となる。これは、向後・富永 (2010) が説明するように、読む内容に関する先行知識を持つことで、トップ・ダウン (top-down) 処理一次の展開を予測し、推論しながら読む過程一が促進され、文章内容を早く的確に読み取ることが可能になるからである (p.95)。

ただし、トピック・センテンスをパラグラフの先頭に置くことはあくまで原則であり、パラグラフの中段や末尾に来る例外もある。例えば、三浦 (2012) はパラグラフの冒頭の二つの文として、「結婚式は幸福と楽しい気分を与えてくれるものだ。しかしながら、結婚式はそれぞれが同じではない。」(p.77) という例を挙げる。この場合、第二文がトピック・センテンスに相当する。逆接の表現を用いた話の方向転換を意図的に行うことで、説得力を高める効果がある。また、戸田山 (2022) あるいは小河原 (1996) が指摘するように、前パラグラフとのつなぎの表現(「一体なぜこのようになるのだろうか」のような問いかけなど)や、話の枕(個人のエピソードなど)を前に置く時など、修辭的効果が意図される場合も、トピック・センテンスをパラグラフの冒頭に置くという原則の例外となる。

トピック・センテンスは、「トピック」と「コントローリング・アイデア」(controlling idea) の二つの部分で構成される。Oshima & Hogue (2007) によれば、トピックは「パラグラフの主題」を、コントローリング・アイデアは「主題についてパラグラフで何を述べるか」を表す (p.39)。三森 (2021) は、コントローリング・アイ

デアはトピックを制御し、一定の「方向付け」を行う機能を持ち、それが文全体の質を決めるとしている (p.145)。また、井上 (2022) は、コントローリング・アイデアが「話の流れを限定している」とも言えることから、それを「トピック限定句」と呼ぶ (p.25)。山岡 (2018) も、コントローリング・アイデアをトピックの「絞り込み」という観点から捉えている (p.55)。

効果的なトピック・センテンスは、十分に方向付けがなされている。例えば、三森 (2021) は、「赤は一般的に、活力や情報を表す色と認識されている」という文を、良いトピック・センテンスの例として挙げている。「赤」というトピックの向かう方向性が、述部で明確に示されており、サポーティング・センテンスで「活力」や「情熱」についての議論が展開されることが予測されるからである。一方、良くないトピック・センテンスの例として、「これは赤である」という漠然とした文が挙げられている。ただし、高橋・鈴木・野田・ジェーゴエリック・飯島・日臺 (2022) が述べているように、トピック・センテンスは、パラグラフ内容を統括する文であるため、一定の抽象性は必要とされる (p.7)。方向付けや抽象性の程度に関する明確な基準は存在しないが、山岡 (2018) が「絞り込み」度合いの違いを示すものとして挙げた、以下の例が参考になる (pp.55-57)：

表1 トピック・センテンスの方向付けの度合い (山岡 (2018) を基に筆者作成)

方向付けの度合い	テーマ：「紙の辞書に対する電子辞書の優位性」
低	① <u>ほぼトピックだけを提示するもの</u> 「最近では、学生が電子辞書を使っているのを目にすることが、全く珍しくなくなった。」
中	② <u>トピックと主張を述べるもの</u> 「電子辞書は、紙の辞書よりも、勉強するのに便利である。」
高	③ <u>トピックと主張と根拠をすべて述べるもの</u> 「電子辞書は小さくて軽く、色々な場所に持ち運んで使えるので、勉強する時には紙の辞書よりも便利である。」

2-2-2 サポーティング・センテンス

サポーティング・センテンスとは、トピック・センテンスで提示された内容を展開する文である。三森 (2021) 及び福地 (2019) が指摘するように、サポーティング・センテンスにおいて記述される内容は、あくまでトピック・センテンスが提示

した事柄の範疇の中にとどまらなければならない。サポーティング・センテンスの機能には、例えば、渡邊（2015）や泉（2009）が説明するように、トピック・センテンスの補足、詳述、例証、根拠づけ、言い換え、補強、帰結の説明などがある。橋内（1995）によれば、パラグラフは一般的に、3つ以上のサポーティング・センテンスを含んでいることが多い（p.8）。Reid（2000）も、パラグラフは、トピック・センテンス及び4文から8文のサポーティング・センテンスで構成されるとしている（p.21）。ただし、これらは一般的傾向であり、例外は常に存在する。

サポーティング・センテンスは、原則としてパラグラフのトピック・センテンスと明確な関連を持たなければならない。澤田（1983）の言葉を借りるならば、サポーティング・センテンスはトピック・センテンスの「中心思想の説明に寄与、奉仕」するものである（p.114）。だが、三浦（2009）によれば、米国の大学生と比べて、日本の大学生の文章にはトピック・センテンスと関連のない「脱線の文の多さが目立つ」（p.124）という。よって、橋内（1995）が述べるように、パラグラフ内には、トピック・センテンスと無関係の文を含めないようにする必要がある（p.10）。さらに、泉（2009）によれば、良いパラグラフ・ライティングの条件の一つは、パラグラフに含まれる各文とトピック・センテンスの関係について明確に説明できるととされる（pp.162-163）。

サポーティング・センテンスは、読み手に明確に伝わるように、具体的に書かなければならない。木下（1994）によれば、サポーティング・センテンスはトピック・センテンスの内容を読み手に納得させる役割を持ち、それが述べる情報が具体的であるほど説得力が増す（p.187）。倉島（2012）も同様に、サポーティング・センテンスは具体的で詳しいほど説得力と論理性を生むとし、その良い例として、具体例や数値データを含む文を挙げる（p.122）。例えば、「大きいほど見やすい」という文よりも、「〇〇cm以上であれば、□□まで認識できる」という書き方が好ましいとされる。三浦（2012）も、わかりやすく、かつ、具体的な内容は記憶に残りやすいとし、その例として、「科学に裏打ちされた事実」や「数値による統計」を挙げている（p.82）。

複数のサポーティング・センテンスを書く際は、読み手の、標準的な順序意識にかなうように情報を提示しなければならない。三森（2021）が述べるように、サポーティング・センテンスでは、原則としてトピック・センテンスで述べた事柄について、その提示順序に沿って補足や説明を行うことが期待されている（p.154）。というのも、読み手はすでにトピック・センテンスから読む内容の見通しを得ているた

め、その予期を執筆者が裏切ると、読み手が混乱してしまうからである。順序意識に沿った情報の提示例として、ここで再び「赤は一般的に、活力や情報を表す色と認識されている」という文を使う。この場合、トピック・センテンスに現れる、左から右への、線形的な順序に基づき、まず、赤と「活力」の関係について述べ、その次に、赤と「情報」についての説明を提示する、ということである。典型的な順序型はいくつかあるが、例えば、テクニカルコミュニケーター協会（2016）は、論理的な文章の展開として、以下のものを挙げている（p.118）：

- ・全体から部分へと展開する。
- ・概要から詳細へと展開する。
- ・既知の事柄から未知の事柄へと展開する。
- ・重要な事柄から説明する。
- ・相手が知りたい事柄から説明する。
- ・作業や手順の流れに沿って説明する。

このように、情報の提示順序の型は様々あるが、向後・富永（2010）が指摘するように、どの展開を用いるかは書くべき内容により異なる（p.95）。ただし、特に意識しておくべき展開型の一つは、既知から未知への情報の配列である。というのも、これは非常に汎用的な順序型だからである。この順序型は、文と文の配列及び文内部での配列に用いられる。倉島（2012）は、パラグラフ内の各文について、文頭を既知情報で始め、文末に未知情報を置くことで、文章のつながりが良い、わかりやすい文章になるとする（p.166）。更科（2020）は、この点について、「風が吹けば桶屋が儲かる」という例を用いて説明している（p.174）。周知のとおり、この話は「風が吹けば、土ぼこりが立つ。土ぼこりが立てば、失明する。失明した人は…」と展開するが、ここには、「土ぼこりが立つ」という既知の事柄が示され、その後「失明する」という未知の事柄が提示される情報の流れが見られる。この話では、既知から未知へという情報提示パターンが終始繰り返されるため、内容が理解しやすい。

2-2-3 コンクルーディング・センテンス

コンクルーディング・センテンスは、パラグラフの終わりを示すと同時に、トピック・センテンスで述べられた話題を再提示する、またはパラグラフの内容をまとめ

る文であり、原則としてパラグラフの最後に置かれる。三森（2021）、田中・阿部（2014）、Hogue（2014）が述べるように、トピック・センテンスの再提示を行う際には、全く同一の言葉を用いた機械的な繰り返しは避ける。井上（2022）によれば、コンクルーディング・センテンスで新情報を提示することは一般的にすべきでないが、橋内（1995）によると、パラグラフの議論から引き出せる一般論を最後に述べる場合もあるという。三森（2021）や井上（2022）が説明するように、コンクルーディング・センテンスは、パラグラフの話題をまとめて、読み手に印象づける役割を持つ。コンクルーディング・センテンスは、次のパラグラフへのつなぎの表現（次節参照）がある場合を別とし、一般にパラグラフの最後に配置される。

コンクルーディング・センテンスは、文脈に応じて省略されることも多い。橋内（1995）、三森（2021）、小熊（2022）など、多くの文献にコンクルーディング・センテンスの説明が含まれている一方、木下（1994）、戸田山（2022）、阿部・富永（2016）など、この要素について特に言及しない文献も多い。泉（2009）は、パラグラフが一つだけの文章の場合、コンクルーディング・センテンスが無ければ「宙ぶらりん」の印象を与えるが、内容的につながりのあるパラグラフが続く場合、最後のパラグラフを除き、コンクルーディング・センテンスの使用は必須ではないと述べる（p.149）。コンクルーディング・センテンスが、パラグラフ・ライティングに関する文献で扱われないことも多い理由としては、その機能がトピック・センテンスの言い換えであるため、サポーティング・センテンスの一種と見なすことができる点が挙げられる。実際、渡邊（2015）は、「まとめの支持文」（p.55）という正鵠を得た表現により、明確にサポーティング・センテンスとして位置付けている。

2-3 メタ言語

メタ言語を積極的に活用することで、効果的なパラグラフ・ライティングが可能になる。田中・阿部（2014）は、「メタ言語」⁽³⁾を「本文の内容とは直接関係のない、文章の展開を理解しやすくするような機能をもつ表現や説明」（p.31）と定義し、「予告のメタ言語」と「まとめのメタ言語」の二種類に分けている。前者は「次に～について述べる」のようにガイド的な役割を持つ表現を、後者は「以上、～について述べた」のように締めくくりの役割を持つ表現を指す。これらの例のように、メタ言語は文自体の場合もあれば、「第一に」や「原因としては」などのように句の場合もある。パラグラフ内でメタ言語が使用されることで、形式的には、トピック・センテンスがパラグラフの先頭に置かれたいケースや、あるいは、コンクルーディ

ング・センテンスがパラグラフ末尾に置かれることがある。田中・阿部（2014）が述べるように、メタ言語を加えることで文章が読みやすくなるが、使いすぎると文章がぐどくなるため、適切なバランスをとることが重要である（p.33）。

2-4 パラグラフの長さ

一つのパラグラフは、およそ200字から400字で、文の数に換算して4文から8文程度を目安として書く。倉島（2012）や木下（1994）は、パラグラフは長すぎても短すぎても好ましくないと述べる。パラグラフが長すぎると読み手の読む気を失わせ、逆に短すぎる場合は、読み手に散漫な印象を与えるからである。木下（1994）は、パラグラフの長さには制限は無いが、「目安として200字、長くても400字以内」（p.191）とし、外山（2010）も200字から300字の長さを標準とする（p.60）。文の数で考えた場合、倉島（2012）や更科（2020）は、パラグラフの長さの目安として、4文から8文を挙げている⁽⁴⁾。

ただし、つなぎのパラグラフや総論的なパラグラフは、例外的に短くなることもある。木下（1994）や三浦（2012）が主張するように、原則として一文だけのパラグラフは書くべきでない。だが、木下（1994）は、「ここで逆の面から問題を見直そう」—これは前節で述べたメタ言語である—など、「移り変わりの文」（p.191）を書く場合や、当該の文が前後のパラグラフから独立している場合には、一文のみによる、つなぎのパラグラフの存在を認める。倉島（2012）も、文章全体で見た時に、総論的なパラグラフ（結果や結論などの重要な情報をまとめたもの）は例外的に短くなるとする。なお、本稿のパラグラフの定義では、一つの文自体をパラグラフと見なすことは難しいが、本稿の目的は、パラグラフを厳密に定義することではないため、例外的に短いパラグラフの存在を指摘するにとどめる。

パラグラフの長さの目安について知ることは、パラグラフ・ライティングの教育実践において有用である。確かに、三浦（2012）が指摘するように、パラグラフの長さは内容によって異なるため、そこに厳密な決まりがあるわけではない（p.69）。しかしながら、上述したように、パラグラフ・ライティングの実践家の多くが、パラグラフの長さに言及していることも事実である。また、教育実践的にも、例えば、学習者からパラグラフの長さについて尋ねられた際、決まりはないと答えるだけでは、学習者を困惑させるだけである。したがって、特にパラグラフ・ライティングの初学者を相手にする場合は、実践家の経験に基づくパラグラフの長さを一つの目安として提示しつつ、文脈によって、適切な長さは異なり得るということを伝える

方がより効果的であろう。ゆえに、本稿では、パラグラフの長さについても積極的に取り上げることとした。

2-5 パラグラフと論文の同型性

論文など、複数のパラグラフから構成される文章を作成する時も、パラグラフの考え方が有効である。三森（2021）は、パラグラフと小論文の関係を議論する中で、両者の構造の同型性をふまえ、図1の関係図を提示した（p.157）。図1のように、5つのパラグラフによって構成される小論文は、英語圏では「5パラグラフ・エッセイ」と通称されている。

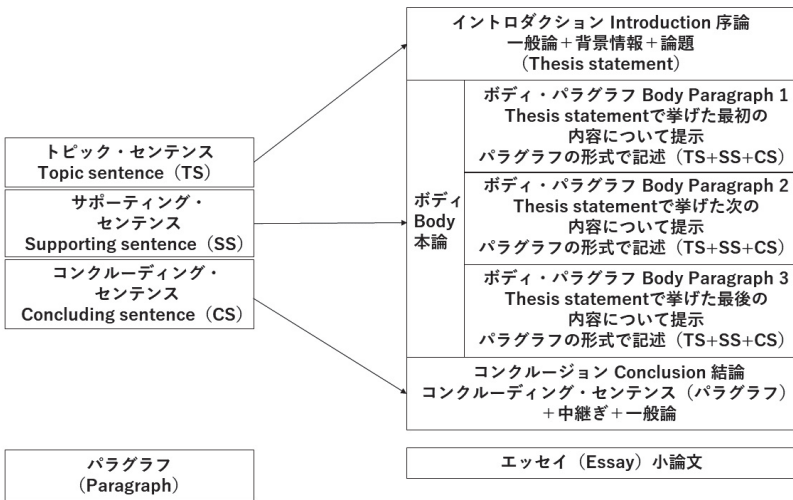


図1 パラグラフと小論文の関係図（三森（2021）を基に一部改変）

また、学術論文もパラグラフ・ライティングの考え方をを用いて作成することができる。小熊（2022）は、パラグラフの役割の類型に、①過程や状況を記述する、②比較や対比をする、③問題を定義する、④原因や影響を述べる、⑤事実関係をまとめた物語にする、の5類型を挙げ（pp.392-393）、これらの類型が、社会科学の研究類型とも対応していることから、学術論文も表2のようにパラグラフ・ライティング的に構成できるとする（p.393）。もちろん、現実での論文執筆の過程においては、このような構造化がいつもうまくできるとは限らない。しかし、図1や表2で示さ

れている、パラグラフと論文の構造の同型性を念頭に置くことで、文章全体の論理構造を意識しながら論理性の高い文章を作成することができるだろう。

表2 パラグラフ・ライティングによる論文の構成（小熊（2022）を基に筆者作成）

序論	① 最初のパラグラフは象徴的な物語narrativeから始め、「研究背景」とする。
	② 主題を定義definitionし、その定義に基づいて先行研究を検討して、対象と方法論を設定する。
本論	③ 本論第一章で、現状を記述型調査descriptive researchした内容を書く。
	④ 本論第二章で、比較型調査comparative researchした内容を書く。
	⑤ 本論第三章で、因果型調査causal researchした内容を書く。
結論	⑥ 最後に、分析と考察を行って結論とする。

3. パラグラフ・ライティングの基本ルール

ここまでの記述をふまえて、パラグラフ・ライティングについて、10の基本ルールを同定することができる（表3）。また、本稿は、10の基本ルールを、その内容をふまえ、「基礎ルール」「トピック・センテンスのルール」「サポーティング・センテンスのルール」「補助ルール」の4つのカテゴリーに分類した。このカテゴリー数であれば、人間のワーキングメモリの制約とも矛盾しないため、記憶の補助にもなるだろう（注4参照）。以下、個別のルールについての補足をカテゴリーごとに行う。

「基礎ルール」に含まれる2つのルールは、いずれもパラグラフ・ライティングの核となる基礎的なルールである。ゆえに、いずれかが欠けた場合、その文章は厳密に言えば、パラグラフではない。したがって、これら2つのルールについては、原則例外を認めない方がよいだろう。なお、ルール2に関して、本稿は、コンクルーディング・センテンスをサポーティング・センテンスの一種と考えているため、「コンクルーディング・センテンス」という用語はルールに含めていない。

「トピック・センテンスのルール」は、パラグラフ・ライティングにおいてトピック・センテンスが持つ重要性をふまえて、いずれも強く意識されるべきルールである⁽⁵⁾。だが、基礎ルールほど原理的なルールではないため、例外を認める場面もあるだろう。

「サポーター・センテンスのルール」は、いずれもトピック・センテンスとの関係で意識されるべきものである。ここでは、特にルール5が重要である。なぜなら、ルール5が守られていない場合、ルール6とルール7をいくら遵守したとしても、それらの文はすべての外的外れとならざるを得ないからである。

「補助ルール」は、ここまでのルールをふまえた上で、より効果的なパラグラフ・ライティングを実現させるためのルールである。これらのルールが守られなかったとしても、必ずしもパラグラフが成立しないというわけではない。その意味では随意的なルールである。しかし、読みやすさに関わるルール8及びルール9、文章の論理性を支えるルール10は、それらを十分に意識することにより、より良いパラグラフ・ライティングにつながることに疑いは無い。

無論、これらはあくまで「基本ルール」にすぎず、パラグラフ・ライティングに関するあらゆる側面を捉えているわけではない。実際には、「基礎ルール」を除いて）例外は常に存在するだろう。また、特にルール4の「方向付け」及びルール6の「具体的」などの程度に関わる表現については、それらが意味するところを完全に言語化することも難しい。したがって、現実の教授場面では、例外の存在にも目を配りつつ、山岡（2018）が挙げたトピック・センテンスの例のように、程度の違いを学習者が感覚的に理解できるように、複数の事例を比較しながら、段階的に教える方法が有効だろう。

表3 パラグラフ・ライティングの基本ルール

「基礎ルール」	
ルール1	1つのパラグラフは、1つのトピックについてのみに述べる。
ルール2	パラグラフは、トピック・センテンスとサポーター・センテンスで構成する。
「トピック・センテンスのルール」	
ルール3	トピック・センテンスは、パラグラフの先頭に置く。
ルール4	トピック・センテンスは、コントローリング・アイデアで方向付ける。
「サポーター・センテンスのルール」	
ルール5	サポーター・センテンスは、トピック・センテンスと関連させる。
ルール6	サポーター・センテンスは、具体的に述べる。
ルール7	サポーター・センテンスは、読み手の標準的な順序意識に沿う形で情報を配列する。

「補助ルール」	
ルール 8	メタ言語は、くどくなりすぎない範囲で積極的に使用する。
ルール 9	パラグラフは、200 ～ 400字で、4 つから 8 つの文を目安に構成する。
ルール 10	複数のパラグラフから成る文章は、パラグラフの内部構造と文章全体の構造の同型性を意識して構成する。

4. おわりに

本稿は、昨今のライティング教育への関心の高まりをふまえ、パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けた第一歩として、パラグラフ・ライティングの基本ルールを整理することを試みた。分析方法としては文献分析を用い、既存の文献を渉猟しながら、文献間で、ある程度の合意が確認されたルールを抽出することを目指した。分析の結果として、4つのカテゴリーに分類される、計10の基本ルールを抽出することができた。

今回の分析目的は、パラグラフ・ライティングの基本的なルールを整理することであり、分析過程で捨象されたものも多い。だが、いずれも実践的には重要なものである。例えば、橋内（1995）は、18種類ものパラグラフの展開パターン（空間配列、原因・結果、比較・対照、問題解決など）を紹介しており、それらは文脈に応じて使い分けることができる。また、河野（2009）が扱っているような、つなぎ言葉や代名詞を用いた、文と文の結束性についての議論も、パラグラフ・ライティングの質を上げるためには重要な視点であろう。さらに、実際にパラグラフを構成する要素は「文」であることから、木下（1994）が提示しているような、文の質についての分析も必要である。これらについても、パラグラフ・ライティング教育の体系化の中で、その位置づけを整理していく必要があるように思える。

パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けては、教育内容のさらなる体系化並びに系列化、そして、教育実践の積み重ねが必要である。まず、パラグラフ・ライティングを（特に初学者に）教える際に扱うべき内容を、10のルールに整理できたことは価値があると考ええる。なぜなら、今後、これらのルールを起点に、本論考を批判的に検討する中で、これらの基本ルールについて見直し、さらに、新たなルールを提案するなど、パラグラフ・ライティングに関する実践知の深化を期待することができるからである。次に、これらのルールをどのような系列で教えるべきかについては別の考察が必要となる。このためには、例えば、鈴木（2003）が紹介している学習課題分析の手法が有効であろう。そして、以上の研究に加え、澤田（2015）

や山根（2018）のように、教室でパラグラフ・ライティングを実際に教えて、その効果を検証する実践研究も進めていく必要がある。

パラグラフ・ライティング教育の対象者には、日本人学生だけでなく、日本語を外国語として学ぶ留学生も含まれる。本稿で分析した文献の多くは、日本語母語話者向けに執筆されたものであったが、その内容は、日本語を学ぶ外国人学習者にとっても有用であり、日本語教育にも活用できる（無論、言語面への特別な配慮は必要である）。また、パラグラフ・ライティングを日本語で学んだ場合も、その技法自体には言語普遍的な側面があるため、留学生の母語のライティングへも学習の転移が期待できるだろう。このように、パラグラフ・ライティングについては、留学生への日本語教育の文脈でも、研究につなげていくことが可能である。

最後に、本稿自体が、今回の分析で抽出したパラグラフ・ライティングの基本ルールに基づいて執筆されている点を指摘しておきたい。これは、倉島（2012）が、パラグラフ・ライティングの解説文章の執筆自体を、まさにパラグラフ・ライティングに基づいて徹頭徹尾行ったことに触発された、筆者なりの実践である。筆者自身、本稿を執筆する過程で、これらの基本ルールの有効性を確認したが、実際に、本論考が効果的な文章になっているかどうか、また、その結果として、本研究の主張が有効であるかどうかについては、読者諸賢の判断に委ねたい。

謝辞

本稿の執筆に際して、査読者二名から有益なコメントを頂戴した。この場を借りて、御礼申し上げたい。

注

- (1) 段落とパラグラフの違いについて上述した際に、段落には明確なルールが無いことを問題として言及したが、ここでパラグラフについても、そのルールについて、文献の間で合意が得られていないことを指摘することは矛盾と感じられるかもしれない。しかし、後述するように、パラグラフについてはほぼすべての文献が前提としているルール（例えば、一つのパラグラフには一つのトピックを書く）がある。文献間による違いは、それら以外の、より細かなルールの扱いについてである。したがって、書き手の間で、共通に理解されるルールが未だに確立していない段落とは、問題の出発点が異なる。
- (2) これらパラグラフの要素を表す日本語には文献の中で揺れが見られる。英語の

topic sentenceの訳語には、例えば、戸田山（2022）、三森（2021）、大井（2008）、山岡（2018）は「トピック・センテンス」、佐藤（2020）、木下（1994）、佐渡島・吉野（2021）、松浦・田村（2022）は「中心文」、井下（2019）、三浦（2012）、井上（2022）は「トピック文」、渡辺・島田（2017）、渡邊（2015）、橋内（1995）は「主題文」、石黒（2020）と吉田（2004）は「小主題文」、澤田（1983）は「題目文」、倉島（2012）は「要約文」、更科（2020）は「キーセンテンス」、三浦（2009）は「話題文」と呼んでいる。supporting sentenceの訳語については、例えば、三森（2021）、薄井（2015）、田中・阿部（2014）、泉（2009）、小河原（1996）、山岡（2018）は「サポーティング・センテンス」、渡辺・島田（2017）、小熊（2022）、佐藤（2020）、渡邊（2015）、石黒（2020）、三浦（2009）、大井（2008）は「支持文」、井上（2022）、藤野（2006）は「サポート文」、戸田山（2022）、更科（2020）は「サブ・センテンス」、井下（2019）、滝浦・草光（2017）は「サポート・センテンス」、倉島（2012）は「補足情報」、木下（1994）は「展開部の文」、三浦（2009）は「サポート」と呼ぶ。concluding sentenceの訳語については、例えば、三森（2021）、薄井（2015）、田中・阿部（2014）、泉（2009）、滝浦・草光（2017）、山岡（2018）は「コンクルーディング・センテンス」、渡辺・島田（2017）、小熊（2022）、井上（2022）、藤野（2006）、大井（2008）は「結論文」、小河原（1996）は「締めくくり文」、井下（2019）は「結びの文」、佐藤（2020）、松浦・田村（2022）は「まとめ文」、石黒（2020）は「小結論文」と呼ぶ。各名称には、それを用いる理由があり、悩ましいところであるが、本稿は、英語の概念をそのまま表現しているという意味で、比較的に中立的なカタカナ表記を用いた。

- (3) 今回分析した文献の中では、田中・阿部（2014）の他に、小河原（1996）が「論理関係明示詞」（p.62）という言葉で説明をしている。また、泉（2009）も、特に、パラグラフとパラグラフの「つなぎ役」としての文を「コネクティング・センテンス」（p.150）と呼んでいる。なお、英語文献では、Oshima & Hogue（2007）がtransition wordsと、Zemach & Rumisek（2003）はtransitionsという言葉を用いている。本稿は、田中・阿部（2014）の「メタ言語」が最も端的で簡潔な表現であると考え、「メタ言語」を採用した。なお、デジタル大辞泉によれば、「メタ」とは「超越した、高次の」の意を表す言葉である。メタ言語は、言語そのものについての言語であり、その意味で通常の言語よりも高次の言語として解釈される。

- (4) これらの経験則に関連して、以下二つのことを指摘しておきたい。一つは、こ

の推奨される文字数は、一般的に読みやすい文の長さに対応しているように見える点である。例えば、200字を4つの文で構成する場合、一文当たりの長さは、単純に平均すれば50字となる。実際、テクニカルコミュニケーション協会（2016）が、読みやすい文の長さとして50字以内を推奨している。今一つは、4文から8文という文の数は、人間の記憶の制約とも適合しているように見える点である。Cowan（2010）によれば、人間が一時的に記憶（ワーキングメモリ）に保持できる情報のチャンクは 4 ± 1 ある。それゆえ、推奨されるパラグラフの文の数として（文をチャンクとすると）4文から8文というのはあながち的外れではない。なお、筆者はこの心理学の知見をふまえ、パラグラフの長さについての目安は3文から5文と考えるが、本稿は、文献間で合意のあるルールを整理することを目指しているため、ここでは4文から8文とした。

- (5) ルール4で対象にしているコントロールリング・アイデアについて、本稿の査読者から、方向付け以外にも、「読者の注意を引き、トピックに興味を持たせる」役割があるのではないかと指摘を受けた。興味深い指摘であるが、本稿で説明した方向付けの機能と比べて、指摘の点は具体性に欠けるという課題がある。また、興味の喚起について考えることはレトリックの範囲であり、パラグラフ・ライティングの「基本」ルールの射程を超えていると思われる。よって、今回のルールの中には含めないことにした。ただし、「応用」ルールとして考慮する価値はあると思われるため、今後の研究課題としたい。

参考文献（日本語）

- 阿部圭一・富永敦子（2016）『「伝わる日本語」練習帳』近代科学社
 荒木昌子・向後千春・筒井洋一（2000）『自己表現力の教室』情報センター出版局
 石黒圭（2014）『「うまい！」と言わせる文章の裏ワザ』光文社
 石黒圭（2020）『段落論』光文社
 泉忠司（2009）『90分でコツがわかる！論文&レポートの書き方』青春出版社
 井上逸平（2022）『もっともシンプルな英語ライティング講義』慶応義塾大学出版会
 井下千以子（2019）『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第3版』慶応義塾大学出版会
 小河原誠（1996）『読み書きの技法』筑摩書房
 小熊英二『基礎からわかる論文の書き方』講談社

- 大井恭子編著 (2008) 『パラグラフ・ライティング指導入門』 大修館書店
- 加藤恭子・ヴァネッサハーディ (1992) 『英語小論文の書き方』 講談社現代新書
- 河野哲也 (2018) 『レポート・論文の書き方入門 第4版』 慶應義塾大学出版会
- 河本健・石井達也 (2018) 『トップジャーナル395編の「型」で書く医学英語論文』 羊土社
- 河野弘彦 (2009) 『英語ライティングの成功法則』 国際語学社
- 木下是雄 (1994) 『レポートの組み立て方』 筑摩書房
- 倉島保美 (2012) 『論理が伝わる世界標準の「書く技術」』 講談社
- ケリー伊藤 (2002) 『パラグラフ・ライティング講座』 研究社
- 向後千春・富永敦子 (2010) 「文書コミュニケーションをわかりやすくする」 海保博之編著『わかりやすさとコミュニケーションの心理学』 pp.87-107 朝倉書店
- 斉藤孝・西岡達裕 (2005) 『学術論文の作法 新訂版』 日本エディタースクール出版部
- 佐藤不二子 (2020) 『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』 スリーエーネットワーク
- 佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄編著 (2015) 『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド』 大修館書店
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2021) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック 第2版』 ひつじ書房
- 薄井道正 (2015) 「初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果-パラグラフ・ライティングと論証を柱に-」 『京都大学高等教育研究』 第21巻, pp.15-25
- 更科功 (2020) 『理系の文章術』 講談社
- 澤田昭夫 (1983) 『論文のレトリック』 講談社
- 三森ゆりか (2021) 『ビジネスパーソンのための「言語技術」超入門』 中央公論新書
- 静哲人 (2019) 『Writing Facilitator Revised Edition [構造から学べるパラグラフ・ライティング入門 改訂版]』 松柏社
- 小学館 (2023) 「メタ」『デジタル大辞泉』 ジャパンナレッジ. (オンラインデータベース)、<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001018105900> (2023年1月31日参照)
- 杉田由仁・キャラカーリチャード (2014) 『Genre Approach to Paragraph

Writing』成美堂

鈴木克明（2002）『教材設計マニュアル』北大路書房

外山滋比古（2010）『文章力 かくちカラ』展望社

外山滋比古（2020）『日本語の個性 改版』中央公論新社

高杉尚孝（2016）『英語ビジネスドキュメント・ライティングの技術』

滝浦真人・草光俊雄（2017）『日本語アカデミックライティング』放送大学教育振興会

高橋良子・鈴木沙季・野田直紀・ジェーゴエリックハジメ・飯島淳・日臺智明（2022）「医学英語ライティング教育 10: 医学英語の授業におけるパラグラフ・ライティング教育の試み 3 パラグラフを書いてみよう」『日大医誌』第81巻第1号 pp.5-10

田中真理・阿部新（2014）『Good Writingへのパスポート』くろしお出版

テクニカルコミュニケーター協会（2016）『日本語スタイルガイド 第3版』一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会出版事業部会

時任隼平・三井規裕・福山佑樹・西口啓太（2022）「初年次生のアカデミックライティングに関する実態調査」『関西学院大学高等教育研究』第12号 pp.31-45

戸田山和久（2022）『最新版 論文の教室』NHK出版

中谷安男（2016）『大学生のためのアカデミック英文ライティング』大修館書店

野内良三（2010）『日本語作文術』中央公論出版

橋内武（1995）『パラグラフ・ライティング入門』研究社出版

一橋大学英語科（2015）『英語アカデミック・ライティングの基礎』研究社

福地健太郎（2019）『図解でわかる！理工系のためのよい文章の書き方』翔泳社

藤野輝雄（2006）『理科系のためのかならず書ける英語論文』研究社

藤吉豊・小川真理子（2021）『「文章術のベストセラー100冊」のポイントを1冊にまとめてみた』日経BP

前田哲宏・河野淳子・Simon Rosati（2021）『5 Steps for Paragraph Writing [5つのステップで学ぶパラグラフ・ライティング]』音羽書房鶴見書店

松浦年男・田村早苗（2022）『日本語・パラグラフ・ライティング入門』研究社

村越行雄（2015）「段落とパラグラフの構造と方法について」『コミュニケーション文化 = Communication in culture』第9号 pp.1-27

三浦順治（2009）『英語流の説得力をもつ日本語文章の書き方』創拓社出版

三浦順治（2012）『グローバル時代の文章術』創拓社出版

- 渡邊淳子 (2015) 『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』 研究社
- 渡辺哲司・島田康行 『ライティングの高大接続』 ひつじ書房
- 八木和久 (2007) 『文章作成のキーポイント』 米田出版
- 山岡大基 (2018) 『英語ライティングの原理原則』 テイエス企画
- 山根正博 (2018) 「パラグラフ・ライティング指導の実践」 『東京学芸大学附属高等学校紀要』 第56号 pp.7-12
- 吉岡友治 (2015) 『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』 草思社
- 吉田健正 (2004) 『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版』 ナカニシヤ出版

参考文献 (英文)

- Auerback, B., & Snyder, B. (1983). *Paragraph Patterns*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc.
- Cowan N. (2010). The Magical Mystery Four: How is Working Memory Capacity Limited, and Why? *Curr Dir Psychol Sci*. 19(1), 51-57.
- Hogue, A. (2014). *Longman Academic Writing Series 2: Paragraphs Third Edition*. New York : Pearson Education.
- Oshima, A. & Hogue, A. (2007). *Introduction to Academic Writing Third Edition*. New York: Perason Education.
- Reid, J.M. (1994). *The Process of Paragraph Writing Second Edition*. New Jersey: Prentice Hall Regents.
- Reid, J.M. (2000) *The Process of Composition Third Edition*, New York: Longman.
- Williams, S.N. (1969). *The Logic of the English Paragraph: A Programmed Approach to Logical Writing & Rapid Reading*, Tokyo: Kenkyusha.
- Zemach, D. & Rumisek, L. (2003). *Academic Writing from paragraph to essay*. Oxford: Macmillan.

Basic Rules of Paragraph Writing: Towards the Systematic Teaching of Japanese Paragraph Writing

NAGAI Atsushi

The present paper describes an attempt to identify the basic rules of paragraph writing. Through the analysis of the existing literature including journal articles and reference books on paragraph writing published in Japanese or English, we were able to distill 10 basic rules of paragraph writing for which there is a certain amount of agreement recognized among the literature we analyzed. These basic rules can be classified into the following 4 categories: “core rules,” “rules concerning the topic sentence,” “rules concerning supporting sentences,” “auxiliary rules.” While there are always exceptions to any rules, these agreed-upon 10 rules should constitute the fundamentals for any learner who wants to learn paragraph writing and lay the foundations for future research and application. Some applied and advanced aspects of paragraph writing such as patterns of paragraphs (temporal, spatial, chronological, etc.) or how to construct effective sentences were inevitably omitted for the purpose of the present analysis, they are nonetheless very important when we write paragraphs in the real context. Also, most of the literature that we analyzed in this research is originally written for the native speakers of Japanese or English, but we believe that the 10 rules for teaching Japanese paragraph writing can be usefully taught to international students who learn Japanese as a foreign language. Further research is needed on what to teach regarding paragraph writing besides the 10 basic rules, how to sequence these rules and the other elements of paragraph writing in a particular course or program, and how learners learn paragraph writing in the classroom.